

# カントウータ

## Cantuta No. 8

平成 17 年 11 月 28 日発行

(社)日本ボリビア協会

### 協会からのお知らせ

#### 会費と寄付に対するお礼 -チャリティゴルフより13万円-

先の総会時点では会費未納であった方々からも総会議事録を送付した後にお振込みを頂きました。またボリビアンチャリティゴルフクラブより¥132,240のご寄付をいただきました。たいへんありがとうございました。浄財ですので儉約を旨として大切にに使わせていただきます。

#### ボリビアのサンポーニャ奏者来日

ボリビア最高のサンポーニャ奏者、フェルナンド・ヒメネスさんが2年ぶりに来日します。日ボ修好90周年の式典の際に友情出演していただいたグルーポ・カンタティとの共演により国内約10カ所で開催がボリビア共和国大使館の後援で計画されています。12月6日はR'sアートコート(労音新大久保会館内)の予定とのことです。

グルーポカンタティ公演に関するお問い合わせは：カンタティ島田様まで

Tel&Fax03-3378-0970

#### クリスマスチャリティ・ミニコンサート

=当協会より5万円寄付=

ボリビアにある、障害のある人たちのリハビリや自立を支援する施設「聖マルティン家」を1998年から、野原昭子さんが個人で運営されています。ボリビアにはこういった施設が少なく野原さんのところは常時25人位の障害者を受け入れ自立援助をしているとのことです。今年、施設の無料

貸与の契約が切れるため、新しい施設の建築の準備が進められており、この活動を支援するためクリスマスチャリティ・ミニコンサート(ソプラノ歌手：菊岡祥子、オルガン：池野裕美)が11月27日(日)11時15分よりカトリック高円寺教会聖堂にて行われました。当協会から渡邊専務理事が出席し、ボリビアチャリティゴルフクラブからご寄付頂いた資金の中から5万円を野原さんに寄贈いたしました。ミニコンサートの入場料と教会関係者の寄付も全額野原さんに進呈されました。

#### ソプラノ歌手宮良多鶴子さん ボリビア公演

当協会の会員である宮良多鶴子さんがボリビアでソプラノコンサートを入場無料で開催します。宮良さんは沖縄のフォスターと呼ばれ日々の暮らしに根ざした、生命を慈しむ歌曲を多数作曲した宮良長包先生の子孫にあたります。そして叔母様がボリビアに移住されているとのことで子供のころからボリビアへの思い入れが強かったとのことです。

移住された皆様のご苦勞をねぎらい、さらなる幸せを祈って歌いたいという長年の念願を今回実現されることになりました。公演の予定は次のとおりです。

12月23日 サンタクルス市中央日本人会  
12月26日 コロニアオキナワ沖縄会館  
12月25日 サンタクルスかりゆし会敬老会  
12月27日 サンフアン移住地公民館  
当協会もこのコンサートを後援しております。

(専務理事：渡邊)

## ボリビアの話題

### カルロス・メサ大統領辞任

2005年6月6日深夜、メサ大統領はテレビを通じて演説し、「国内の混乱が予想以上に深刻になったのは自分の責任」と述べ、大統領職を辞職する意向を明らかにした。

### 新大統領に最高裁長官エドゥアルド・ロドリゲス氏が選出

南米最貧国ボリビアの政情不安の渦中で政治色のない最高裁長官に大統領のいずが転がり込んだ。国立サンモン大学で法学を学び、ハーバード大で公共行政学の修士号を取得。1999年最高裁判事に選出され、今年1月から長官。堅実な経歴同様人柄もまじめの一徹との評。就任演説では、総選挙を求める国民の声に早期に応える意向を示した。6月17日、大統領はサンタクルス市に出向き10時間で教会、CAINCO 振興委員会、市役所、県労働団体(COD)、生産者団体、軍部、インディヘナ団体などと会合し、意見交換した。市民の高い評価を得た。

### 平成17年度春の叙勲

= 神谷ヨシさん =

サンタクルスの神谷ヨシさんが旭日単光章を受賞された。伝達式はサンタクルス中央日本人会館で行われました。長年にわたる医療活動の功績が認められたもので、ボリビアでは女性初の勲章受賞となります。神谷ヨシさんは第一次移民で1954年に沖縄からボリビアに移住。うるま移住地、パロメティーヤ、オキナワ移住地で助産婦として活躍。医療設備の整っていない初期の移住地で昼夜を問わず駆け回り、診療所ができてからは移住者の健康管理に尽され、日本人、ボリビア人の区別なく医療活動を行い、これまでに取り上げた赤ん坊の数は900名に達するとのこと。「この度は大変な名誉を頂き感動しています。皆様の健康管理、医療活動にできるかぎりの体力と情

熱をつぎ込んできました。そのため家事に専念できず、夫と6人の子供に迷惑をかけたことと思います。今後とも健康に気をつけて頑張ります」と受賞の喜びを語った。

### トロンピヨ空港

トロンピヨ空港はサンタクルスの空の玄関として長年運営されてきた。80年前に誕生したときは密林の中に空港があるような感じだったが、1970年代の農林業ブームでサンタクルスが飛躍的な発展を遂げてからは、空港周辺に住宅地が密集するようになり、航空機の事故が相次いだ。1976年にはボーイング707型機が離陸に失敗し、サッカースタジアムと小学校の近くに墜落して死者130人余りを出す大惨事があった。それ以後もセスナ、パイパー、ビーチクラフトなど7機がサッカースタジアム、現県庁前、グリゴター通り、カントリークラブ・ラス・パルマスなどに墜落。空港移転の必要性にかられ、日本政府からの円借款でビルビル空港が建設された。以来大型航空機の発着はビルビルで行われ20年になる。しかし最近になって民間航空管理局はAEROSUR会社にトロンピヨ空港で週一便発着することを許可して運行が開始され、住民から苦情が相次いでいる。トロンピヨ空港敷地は150ヘクタールあり南北に細長く伸びているため、地域住民は遠回りして反対側に行かなければならず、以前から空港の閉鎖と第三次、第4環状線などの接続を強く要請していた。1995年には市条例で小型民間商業便などもすべてビルビル利用を定めたが、航空会社の反対で未だに実現していない。そこで今度の大型機の運行開始で、閉鎖問題が持ち上がっている。

### 天然ガスはあるけれど...

ボリビアの天然ガス埋蔵量は天文学的数学だそうだが、輸出をあまりしていないので宝の持ち腐れのような状態にある。先にゴニー政権崩壊の発端はアメリカのガス輸出問題で、どこの港から出すかで揺れて結局政権の崩壊にまで至ったが、その間

に相手側のアメリカの会社はインドネシアからガス輸入することで契約してしまい、ボリビアはチャンスを逃した。メキシコモボリビアのガスに興味を示していたが、結局他の国と契約し、ボリビアからの輸出は先送りになった。ボリビアは現在アルゼンチンとブラジルに輸出しているのみである。しかし、最近の社会情勢が不安定なことから、新石油法の公布で石油会社に対する租税や付加価値税を増税したことなどの影響で、周辺諸国のブラジル、アルゼンチン、チリなどはボリビアと取引できないと、ペルーとガス輸出交渉を始めた。

### サン・フワン日本人移住地

#### 入植 50 周年記念祭典に出席して

大貫良夫

(東京大学名誉教授)

去る8月20日、ボリビアのサンタ・クルス郊外で500人あまりの日本人とその家族、そしてボリビア政府と日本政府の代表者が集まって、盛大な式典が挙行されました。サン・フワン移住地入植50周年を記念する祭典でした。

以下、概要を述べます。

2005年8月19日、未明というには早すぎて、どちらかといえばまだ夜中のような午前2時半、タクシーでリマの飛行場へ駆けつける。3時には飛行場にきているようにという指示に従ったのだが、案の定ロイド航空のカウンターには誰も来ていない。4時過ぎてからチェックイン。それから特に遅れることもなくペルーを離れ、ラパスの飛行場に到着。入国手続と税関検査の後、飛行機を乗り換えてサンタ・クルスに向かう。

やや霏のかかる空だが気温は高い。乾燥して暑い空気のサンタ・クルスである。日本の渡邊英樹さんが連絡をしておいてくれたおかげで、飛行場では現地在住の藤井憲次氏と坂口清氏の出迎えを受けることができた。すぐに町の中のホテル、ロス・タヒーボスに荷物を下ろし軽装に換える。この

ホテルは中庭にプールがあり、いくつかの低い棟が離れのように配置されて、落ち着いた静かな感じのホテルである。中庭に面した食堂には壁がなく、外の風が入るいかにもトロピカルという雰囲気である。

お昼を日本人の経営するラーメン屋ですませて一休み。夕方、藤井さんの案内で坂口さんのお宅に向かい、奥さんの手料理の夕食をご馳走になる。いろいろと昔話やサンタ・クルス周辺の事柄の話聞き、またたく間に時間が過ぎた。

ホテルに帰って、念のために明日の式典での挨拶を日本語のものからスペイン語のものに翻訳し、ホテルのコンピューターでプリントアウトを作る。渡邊さんのファックスによると、明日私はスペイン語で挨拶をすることになるらしい。原稿だけは用意しておく必要がある。

8月20日は5時起床、6時に出発となった。藤井さんの運転する車に、平良さんと以前JICAで仕事をされていた志賀先生、そして私が乗る。坂口さんご夫妻は別の車で先行された。そして2時間、約120キロの道を走ってサン・フワンに着いた。

受付のテントが張られ、記念碑には白い幕がかかり、大勢の人が動きまわっている。準備は着々と進んでいる。サン・フワン日本ボリビア協会会長の日比野正毅さんが精悍な顔つきで、ときに大きな声を出して陣頭指揮をとっている。藤井さんから紹介されてご挨拶をし、日本から預かってきた寄付金をお渡しして、まずは今回の使命の一つを全うする。

続々と人が集まってくる。腰の曲がった老人たちも来る。みんな血色のよい顔で、大地に根付いて生きてきたという農民の貫禄というものが出ている。きちんと背広を着た青年やスーツに身を固めた若い女性も多くいて忙しく動いている。言葉はスペイン語だったり日本語だったりなので、このサン・フワンで生まれた2世の人たちなのであろう。あてやかな着物の若い女性たちもいた。

控え室で白川光徳大使ご夫妻、福岡県と長崎県の代表、サン・フワン町長カツミ・

バニー氏（サン・フアン生まれの 2 世の町長でまだ 30 代の若さで日本語も上手。名前は日本語で伴井勝美と書く）ボリビア日系協会会長根間玄真氏などに紹介されて少し歓談をする。

式典はまず日本政府から寄贈された記念碑の除幕式で始まった。その石碑には小泉純一郎首相の字で「拓けゆく友好の懸け橋」と刻まれている。日比野会長と白川光徳大使が白い幕の紐を引いた。続いてその後にある大きな記念碑の除幕となった。

移住の歴史を描いた大きな彩色壁画が横長に広がり、その下に黒い大理石にびっしりと移住者の名前が刻まれる。大きな白い布が引き落とされると参列者から感嘆の声が漏れた。

つぎに場所を変えて、今度は物故者の慰霊碑の除幕式になった。このときにはボリビア政府の代表たちも到着して列席した。大統領も出席予定であったが、急用で来られず、代わりにロアイサ外務大臣が農業大臣や国民参加省大臣などと列席し、慰霊碑に花束を添えた。日本ボリビア協会からは私大貫が花束を捧げた。

炎天下の式典は無事終了し、一休みしてから、巨大な多目的体育館での式典となった。日比野会長の挨拶に続きボリビア国大統領のメッセージが代読され、サンタ・クルス市長、サン・フアン町長、福岡県や長崎県の知事からのメッセージが伝えられた。日本語のメッセージや挨拶は事前にスペイン語に翻訳印刷されて、出席の招待客に渡されていて、大臣や市長などのボリビア側の代表者たちにとってはたいへんよかった。私は前日に言われていたので、日本ボリビア協会の代表として、スペイン語でおおよそ下記のような挨拶を述べた。

### サンフアン日本人移住地 入植 50 周年記念祭典挨拶

サン・フアン日本人移住地入植 50 周年記念祭典にあたり、日本ボリビア協会を代表しまして山下徳夫会長、林屋永吉理事長、渡邊英樹専務理事はじめ会員全員の心からなる祝意を表する次第であり

ます。

日本とここサン・フアンとはまさに地球の表と裏の関係になります。昼と夜とがまったく逆になります。日本から見ればそのような遠いところへ、そして熱帯の原生林という途方もなく苛酷な環境に、今から 50 年前にサン・フアン移住の第 1 歩が刻まれました。裸と素手だけといっても過言ではない状況で、ここを今日見るような豊かな生産地帯に変えるには、私たちの想像を絶するご苦労があったと思います。私たち日本ボリビア協会の会員はそれぞれに何らかの縁があってボリビアとつながりを持ちました。そのような会員にとってサン・フアンをはじめとしてサンタ・クルス地方の開拓にまい進されてきた同胞の歴史は、とても他人事とは思えません。日本ボリビア協会は、これからも日本において移住者の皆様の活躍とその歴史を広く伝え、同時に日本と皆様との絆をより強いものとすべく、努力をしてゆきたいと思います。

さて、移住者の方々の苦労を思うとき、私の思いはさらに遠い昔、それも今から 1 万年以上も前の頃に飛んで行きます。このボリビアの大地に始めて到達した人たちとその歴史に思いを馳せるのです。その人たちはアジアの東北部からアラスカに移り、そして南下してきた人々であります。最初のボリビア人は私たち日本人と血のつながったアジア人だったのであります。

作物のできない寒冷の高原、生い茂る樹木と害獣や害虫の繁殖する熱帯の森林、乾燥の強い山岳地帯、最初のボリビア人たちはどれほどか苦労をしたことでありましょう。しかしそれからの 1 万年の間に驚くべき創造力を発揮しました。農業のできない高原ではリヤマとアルパカの家畜化を達成しました。山間部では高いところから低いところまで、高度に応じて効率のよい農業を発達させました。高いところではジャガイモ、オカ、オユコ、マカ、キノア、低いところではトウモロコシ、インゲンマメ、ユカ、サツマイモ、カボチャ、トウガラシ、ピーナツなどを

作りました。そして高いところの産物と低いところの産物を社会の全員にゆきわたらせたのがティワナクの国家でした。巨石を加工して積み上げる建築技術や、青銅の冶金術は、後のインカ帝国に引き継がれてゆきました。

最初のボリビア人、ペルー人、チリ人、そしてブラジルやアルゼンチンの住民は、みんなアジアからの移住者でした。そして無人の大地に裸同然の姿で住み込み、さまざまな文化を生み出してゆきました。

そしてこのサン・フアンでは 50 年前にふたたびアジアからの人々が移住してきました。さすがに 20 世紀の英知を備えた人たちですから、発展の速度は違います。しかし短いとはいえここまでの間に、大変な努力が積み上げられてきました。

一方、ボリビアには 16 世紀になってヨーロッパからの人たちが入ってきました。この人たちの文化とそれ以前の文化の出会いが、それまでどこにもなかったボリビアという国の文化を生み出してゆきます。日本からの移住者が持ってきた日本文化も現代ボリビア文化の構成要素になっているはずで、アジアからそしてヨーロッパから、そしてまた日本から、このサンタ・クルス地方には故郷から遠く離れた人たちが住み込み、開拓し、新しい生活を作り上げてきた歴史があります。こうした異なる文化的背景を持つ人たちの出会いは、非常に大きな文化的創造性の源です。これからのサン・フアンがボリビアばかりでなく南米大陸をリードする大きな創造力と想像力の源となることを期待します。

サン・フアン万歳、ボリビア万歳。

続いてこれまでさまざまな分野で活躍をした植民者たちの表彰が行われた。車椅子に乗る年輩の女性も何人かいた。多くの人々が長ければ 50 年、短くても 30 年はここで開拓の仕事に打ち込んできた。その日焼けした顔と深いしわには苦闘の歴史が刻まれている。と同時に、柔らかくなった髪、やさしい目と口元の笑みに、大きな仕事をし

終えて前線から退いた静けさと安堵が見えたように思った。

式典が終わり、招待者たちは舞台からフロアに下りて、用意された席に座る。会場の両側に並べられた料理を各自好きなように皿に取って昼食会となった。体育館一杯に並べられたテーブルに五百人はいたであろうか、参加者が座り、料理に舌鼓を打ち、ビールでのどをうるおし、歓談しきりとなる。さすがに農業開拓の場である、牛・豚・羊・鶏・アヒルの肉、米飯、麺、パン、そして新鮮な野菜が山と盛られている。どれもおしく、ときに日本的な味付けもなされていた。その間、舞台ではコーラス、民族舞踊、日本舞踊などが演じられた。フロアのテーブルでは歓談が弾み、話し声や笑い声が高くなり、人々の顔は赤みを帯び艶やかにもなる。

やがて少しずつ参加者の数が減って行き、自然解散のようになる。白川大使の一行や外務大臣たちも会場から退出した。これを潮時に私も藤井さんの車に乗って、夕暮れにはまだ少し間のある午後、サンタ・クルスに帰った。

式典の間、50 年前に、昼間でも奥の真っ暗なジャングルに入りこんだ移住者の、そのときの気持ちを押し量るばかりであった。のちに大統領になる政治家が、若いときに開拓の現場を見て、この日本人たちは遠からずみんな死んでしまうだろうと思ったそうである。それが今や首都ラパスへの最大の鶏卵供給者になっている。今日ここに集まることのできた初代の移住者たちの顔には、確かにこれまでの生の歴史が刻まれていると思う。それぞれ穏和な老顔ながら、並はずれた人生の経験を積んだという深みと迫力を宿している。

その夜、藤井さんが、アヒルの丸焼き料理の店を出している友人のところへ連れて行ってもらい、からりと揚げたアヒルの丸焼きを頬張った。誰もがネグロとしか呼ばない主人と藤井さん、そして私の談笑が遅くまで続いた。満腹してホテルに帰っても、昼間の感銘が残っていてなかなか寝つくことができなかった。 おわり

.....

## ポリビア百話

### 先住民の血の上の繁栄

- その5 -

高畑敏夫  
元ポリビア大使

ゴム成り金達の豪勢な生活を支えたのはアマゾン先住民達の血であった。白人達は『インディオ狩り団』を組織し、手当たり次第に半文明化したインディオの村や未開のインディオの部落を襲い、男はゴム労働に駆り立て、女は町に売り飛ばした。逃亡しようとするのを殺し、生産量が少なくても殺した。さらには、楽しみのためにも虐殺した。特に悪名高いのは『プトゥマーヨの虐殺』である。プトゥマーヨ河はイキートスの北方を流れている全長約2,000キロの大河で、現在はペルーとコロンビアの国境線となっている。当時この河の中・下流約1,500キロ間の両岸に主としてウイトト族とボラ族約5万人が住んでいた。この河にゴム採取に入った『ペルー・アマゾン会社』の監督達が血に狂ったようにこの先住民達を虐待し、虐殺した。この地方に住んでいたインディオの大部分が殺されたといわれている。

しかし、やがて先住民虐待の噂が欧州に広まり、世論が高まって調査委員会が設置され、英国政府は調査のためにリオ・デ・ジャネイロ駐在総領事サー・ロジャー・ケースメントを急派した。ケースメントはその前にベルギー領コンゴで起きた原住民虐待事件を調査した経歴があった。ケースメントの報告で、1900年から1911年までの間にプトゥマーヨ河筋だけで計4,000トンのゴムが生産され、その陰で3万人ものインディオが殺され、僅か8千人に減っていたことが判明した。ゴム1トン毎に7人の命が失われていたことになる。

### ゴムの種子の海外流出とアマゾンゴムの衰退

ゴム工業の発展に伴い原料ゴムの使用量が飛躍的に増大したが、原料ゴムの供給源はアマゾン流域の野生のものに限られ、ブラジルによる独占に近い形が定着し、供給量が限られていた。有用作物の生産がいずれかの国に限られている場合、他の国がこれを他の場所に移植・栽培して独占を破ろうとするのは自然の成り行きであった。当時英国では東インド会社とその支援を受けて活動を進めていた王立キューガーデン植物園が中心となってアジアその他の植民地にモノカルチャー農業を定着させるための"plant introduction"政策を押し進めていた。1870年代に入って東インド会社を所管するインド省大臣となったマーカム(Sir Clements Robert Markham 1830-1916)卿は30歳のときにアンデス地域から野生のキナノキ(ペルー原産のアカネ科植物。樹皮がマラリアの特効薬キニーネの製造原料となる)を持ち出してキューガーデンに持ち込み、後にジャワに移植・栽培してキニーネの大量生産の基礎を築いた人物であるが、これにならって南アジアにおける野生のゴム樹の移植・栽培を図り、キナノキと平行してパラゴムノキの種子をブラジルから持ち出したが枯死して生育しなかった経緯があった。彼の依頼で植物学者コリンズ(J. Collins)は1872年にパラゴムノキが最適との報告書を纏めた。

アマゾン河を400マイル程溯ったサンタレムの住人であったウィッカム(Henry Wickham)もゴムの種子の密かな持ち出しを計画していたが、マーカムの失敗の前例もあり、輸送途中での種子の腐敗を心配していた。彼はキューガーデン植物園々長のフッカー(Sir Joseph Dalton Hooker 1817-1911)卿の指導を受けながら1876年早春にアマゾン川支流のタバホス川とマデイラ川に挟まれた地域で7万粒の種子を集め、1粒ずつバナナの葉に包み、サンタレムに入港した太洋航海船アマゾナス号を利用してリヴァプールに運んだ。そこには機関車の釜に石炭を焚き、いつでも発車可能な状態の列車が待機しており、アマゾナス号が入港するや否や種子を積み込んでロンドンに向かい、王立キューガーデン植物園に

届けたと言われている。フーカーは同植物園のすべての温室を空にして種子を蒔き、2,800粒を発芽させることに成功したが、これは当時の植物学の常識から見て驚異的な発芽率と言われている。翌1877年、1,900本の苗木がセイロンの王立植物園に送られ、そこからさらにマレー半島等のプランテーションに移植された。

1889年には東南アジア全体で半トンのゴムが生産されたが(ゴムの木が樹液を出し始めるまでには7年かかる)、1900年には4トンに達し、1905年には145トンに、そして1910年には8,200トンに増大した。その後も栽培ゴムの生産は上昇の一途を辿り、1920年には30万トンに、さらに1930年80万トン、1940年140万トン、1950年には180万トンに達した。

英国のほかにオランダ植民地などでも別種のゴムの移植・栽培が試みられたが成功を見なかった。英国は世界のゴム生産の80%を握り、立法措置によりゴムの生産を抑制し、その輸出を厳重に統制したため、1925年にはゴムの価格が21年の5倍にも暴騰した。かくして、第2次大戦期に合成ゴムの大量生産が始まるまで、英国は世界のゴムの独占体制を守った。

他方野生ゴムの方は1912年に生産が7万トンのピークに達したが、その同じ年に生産量において栽培ゴムに抜かれた。マレー半島における栽培ゴムの成長により、1912年には価格が原価割れとなり、また長年にわたる乱獲の結果樹脂の採取量も減退を続けた。マナオスでは劇場は閉鎖され、ナイトクラブや高級商店も消えていった。

## じゃがいもの旅の物語

### インカからジパングまで NO.8

杉田房子  
旅行作家

浜辺の焚き火と船の灯を遠く眺めおろす城でも、食事を取りながら、隊長と神父と船長が話し続けていた。浜辺の船乗りの食事と違って、ここには船で運んできた小麦粉のパンがあり、羊や鶏が焙られている。

「ここで栽培した小麦や飼った羊を早く食べてみたいものですな」

牛や馬まで運ぶ苦勞をさせられた船長が言うのに、食料集めでは悩みの耐えない隊長が頷き返す。

「大丈夫ですとも。町を作り、平野を耕す。灌漑の溝を掘り、水道の石橋をかける。インディオには古代ローマ人並みの建設と建築の技術がある」

神父が言うのに、隊長が改めて頷きながら相づちを打った。

「パチャカマの神殿、クンツル・ワシの殿堂、チャピン・デ・ワルタルの石城。いずれもたいした技術だ。金銀も、運びやすいために溶かして延べ棒にするのが惜しい細工品がある」

「本国でもっと素晴らしくなりましょう」

神父が生真面目に言った。

「あの石のような食べ物も、わが国で根付けばもっと役立ちますぞ」

「しかし、乾燥して石そっくりにする前のパパスだかパタタだかが、山地と平地でずいぶん違うとか、本国で根付きますかな」

首を傾げる隊長と船長に神父は答えた。

「ご覧下さい。このインカの国を。アンデスの山こそ奥深いですが、乾いた大地に灌木に草むら。風土はスペイン本国に似ています」 - そのインカとアンデスをスペインへ運ぶ金銀で船脚も重く太平洋に乗り出した帆船から、神父は眺めなおしていた。インカの港町は遠く霞み、アンデスも白銀の山稜だけが浮かんでいる。こうしてみると、なつかしい故郷スペインとは全然違っていった。やはり異国で、それを証拠立てるように船乗りとはまるで肌の色が違うインディオの男女が数人、神父のそばの甲板に座り込んでいた。

はるばるとスペインまで連れて行かれ、国王の前に立たせられるとも知らず、じゃがいもやら、トウモロコシやら、食物を入れた袋を包みなおしたりしている。哀れみと、パナマに戻るだけの自分と比べた羨みと、交錯する感情に神父は胸をうずかせ、片言で話しかけた。

「パパスか。チュノは持っているかね」

細い目をなくして、インディオは喜ぶ。

「パパス、チュノ」

畑仕事をする彼らの、素朴な姿を神父は思い出した。道具は太い棒。丸めた先端を肩当に、中ほどは足踏みをつけた棒で掘り、耕す。もうひとつの棒は平らな板がついていて、地面をならす。耕すのも収穫も村人が総出で、歌いながらゆっくりと大地に取り組んだ。

山地のじゃがいもがのんびり休眠するのも、何の不思議もなさそうだった。平地のじゃがいもやサツマイモは植えればころころと生えてくるのが当たり前のようにだった。トウモロコシやピーナッツはああい固い大地に負けないから固い実をつけるのだし、トマトやナスはあの歌声とともに植えつけられるから、彩り豊かになるのだった。

「スペインで植えたら、どうなるだろう」

神父の想いは故郷に飛んだ。荒れた畑、這い回る農夫、威丈高な領主や地主。あの狭苦しい世界では、人参や大根がか細く根を下ろし、豆やブドウの彩りがせいぜいなのも仕方がないかもしれない。

「しかし、キャベツや辛子、木綿にひょうたんなど、ヨーロッパにもインカの野菜と似たようなものもある。スペインのものをインカへ、インカのものをスペインへ根付かせられないことはなかるう」

これは布教と並ぶ心楽しい仕事だ。ピサロ総督やアルマグロ將軍は気忙しいから無理としても、ルウケ大司教はお力になるに違いない。パナマにおられればいいが -。

ざっと船首に水しぶきが上がって、神父は夢想から醒めた。三本マストの真ん中で聖十字を描いた主帆が潮風に満々と張っていた。索具や帆綱が笛のような音をたてて風に鳴る。しばらく船に乗っていなかった神父は、船酔いにかがみ込んだ。

気がつくと、インディオが口に噛めとすすめている。黒っぽい丸薬のようなものには覚えがあった。干した葉を揉み、固めたコカで、気付けと麻酔の両方に効く。神父が噛むのを、嬉しそうに見ていたインディオが言った。

「お腹痛くなったら、イペカ草噛む。パパスの芽食べるとお腹痛い。子供死ぬ。イペカ草噛む。痛くない。死なない。コカ知っ

てるピラコチャ、イペカ草知ってるか」

イペカ草を知らなかったから、ルウケ大司教がいたパナマの聖アナタシア教会では、神父や修道僧が腹痛に苦しんだことがあった。先に戻った帆船が積んできたじゃがいもを植え、やがて生え出した葉がみずみずしいので、サラダ代わりに食べたのがいけなかったらしい。

「芽は茎に育ち、葉が茂る。ところがその芽に腹痛を起こす毒があった。それでは苦しんだのも当たり前だが、それにしても土の中で育つ本体に毒がないとはね」

(つづく)

## ボリビアの現実を直視した映画

### 『最後の庭の息子たち』

細野 豊 (詩人)

ボリビア映画『最後の庭の息子たち』( Los Hijos del Ultimo Jardin )を見た。ボリビア・ウカマウ集団がホルヘ・サンヒネスの監督・脚本により作成した映画で、日本での配給はシネマテーク・インディアスが担当。一般公開はされなかったので、7月30日から8月5日にかけて渋谷のユーススペースで自主上映された機会に鑑賞した。この映画が上映されることを知ったのは、映画の配給に協力した現代企画室(出版社)の唐沢秀子さんが詩人の水野るり子さんを通じ知らせてくれたお陰であった。

ウカマウ集団は、1966年に初めての長編映画『ウカマウ』(この映画が好評を得て、このタイトルが集団名として採用された)を制作して以来、『コンドルの血』(1969)、『人民の勇気』(1971)、『ここから出て行け』(1977)、『地下の民』(1989)、『鳥の歌』(1995)等の映画を通じてボリビアが抱えている基本的な問題を訴え続けてきた。基本的な問題とは、16世紀のスペイン人によるボリビア征服と植民地支配、19世紀における独立とその後の歴史の結果としてある現在のボリビアが抱えている諸問題、即ち白人と先住民とメスティソとの間に存在する人種



偏見・差別や経済的格差及び権力者たちの汚職等である。

今回見た『最後の庭の息子たち』のテーマも例外ではない。映画のあらすじは次のとおりである。 厳しい経済危機が続き、政府高官の汚職が取りざたされ、抗議の人々の街頭デモが繰り返される首都ラパスが舞台である。映画の主役は、経済危機の波をまともに受け、生活の維持が困難になっている中産階級の家庭に生きる多感な青年フェルナンドである。彼自身定職につけず、隣国パラグアイとのチャコ戦争で手柄を立て、数々の勲章を授けられた父も年老い、妹も失業しているため一家は家賃が払えず、立退きを求められている。父は、思い悩んだ挙句、家宝の勲章を手放す決心をし質屋へ持ち込むが、二束三文の値を付けられて怒り心頭発する。結局勲章を売らずに店を出、道端のベンチで溜息をつくばかりである。このような状況の中でフェルナンドは、現代風に享乐的な生き方をしている友人で、サッカー仲間だという点のみで繋がりを持っている数名と謀って、汚職で蓄財した悪徳国会議員の家へ押し入り、大金を奪う。一行は、盗んだ大金を貧しい先住民（アイマラ族）の村で生活改善のために使ってもらおうと、その村を目指して旅立つこととなるのだが、案内役を頼もうとその村出身の男の家を彼らが早朝訪ねるところから映画は始まる。そして画面は現在（その時点）から上に述べたような過去へ、過去からまた現在へと錯綜して展開していく。途中で、盗んだ金を仲間うちで山分けしてしまおうと言い出す者が出てきたりして仲間割れしそうになるが、何とか全額を携えて村へ到着する。そして、ロビンフッドや鼠小僧のような義賊気取りで、先住民たちに大金の提供を申し出る。アイマラ族の人たちは、古くからの村の慣行に従い、村民集会を開いて討議した結果、「提供を申し出られた金は、二重に盗まれたものであり、そのように汚れた金を受取るわけにはいかない」と拒否する。 すごすごとラパスへ引き返してきたフェルナンドを待っていたのは、家を追い出された家族たちで、妹は体を売って家計を支えなければ

ならないところに追い込まれている現実であった。 行動を共にした仲間たちは過去に犯した罪が露見して警察に逮捕される。フェルナンドは一人街路際の壁に希望の言葉を書き付けるが、ボリビアの中産階級の暗い未来が暗示されるばかりである。

この映画は、ボリビアの現実を厳しく直視し、表現しているが、先住民たちが持続している健全な精神には、望みを託し得るものがあると思った。

### 沖縄移民の父

ビクトル・パス・エステンソロ -その3-

勘葉芳一  
猫野滋磨

ボリビアではトマス・モンヘ大統領（民間）が1947年の選挙と見せかけの大赦を発表したがMNR 党員への追求の手を緩めなかった。選挙はエルソグ大統領（民間）を選出し大実業家や外資系の利益を守る保守的な政治を行い、国の経済と社会的危機は募るばかりであった。

アルゼンチンはボリビアとの国交を再開、ボリビア政府はブエノスアイレスの自国大使を通じて亡命者への制裁を求めた。

その結果、隣国のウルグアイ国へ向かった。1949年、エルソグは健康上の理由で辞任、ウリオラゴイティア政権（民間）が発足するが保守的な路線を続け国民の不満は高まった。

1951年1月、アルゼンチン政府は突然ビクトル・パス達の帰国を許可した。この年ボリビアで選挙が行われるにあたり、MNR の第5回党大会でエルナン・シレス・スアソが党首に選出された。これまで MNR は市内においては絶大な支持を持つ党だったが、組合運動にはその弱さを露見していた。しかしこれ以後大衆を導く機構へと変貌していく。この年の選挙はまだ亡命先にいたパス・スアソの MNR が43%を獲得、勝利を収めたが38%の無効票が生じたためマメルト・ウリオラゴイティア大統領は選挙を無効とし、俗にいう「マメルタソ」

で軍部へ政権を譲った。

ウリオラゴイティア政権は1950年に国勢調査を50年ぶりに行った。この50年で人口は180万人から302万人へ増加、33%が都市部に66%が内地部に在住、ラパスが32万でもっとも多い人口を抱えていた。70.5%が農業、8%が産業（内半分程度が鉱山夫）に従事していた。63%が原住民であり（50年前と比べて57%の増加）、言語では36.5%がケチュア語、36%がスペイン語、24.5%がアイマラ語を日常語とした。しかし文盲率は69%に達していた（50年前は80%）。

チャコ戦争は国民が自国の置かれている立場と言うものを認識させた。それまで植民地時代と変わらず一握りの権力者によって押さえ込まれていた民衆は新思想を抱いて以後全国的な運動に発展していく。1952年の革命は起こるべくして起こったと言っても過言ではない。ここまで辿り付くのに幾度か失敗を繰り返し、折り返しのない最終的な方法であった。

20世紀のラテンアメリカではその発生した地域、或いは国の規模に対し、それ相応の影響をもたらした革命が3つある。ひとつは1910年に「土地は働くものの所有物である」主義のもと起こったメキシコ革命、ひとつは1959年に民主発展をもとに後に社会主義へと移行したキューバ革命、そして1952年のボリビア革命である。

1952年、労働運動は鉱山夫の地を基点に日増しに拡大し、4月9日その頂点に達し政権を獲得した。ビクトル・パスは亡命先のアルゼンチンから指示をだしていた。4月11日から14日の間、シレス・スアソが革命会を指揮し、新しい選挙を4ヶ月以内にとの声が挙がったが、シレスは頑固としてMNR党首の帰国を待ち、15日ビクトル・パスへ政権をわたし第54代ボリビア大統領が誕生した。9日の革命が成功してアルゼンチンからボリビアへの移送の飛行機を待機していたビクトル・パスはペロン大統領へ別れの挨拶に出向いた。その時ペロン婦人のエヴィタと会見した。白血病に侵され痩せ細っていたエヴィタはしかし凜とした声で「パス博士、あなたはボリビア

大統領になることでこれまで戦ってきた権力者からは恨まれましょう。しかしあなたに力があるならば国民からは尊ばれましょう」と激励の言葉を述べたという。彼がボリビア大統領として革新的な改革を進めていた1952年7月26日、ラジオはエヴィタの死を告げた。

第一次パス政権は1952年4月15日から1956年8月6日に及んだ。この期間に発令された改革はボリビアの近代化の門を開くものだった。MNRが掲げた主義のもと、1952年7月13日に全国民参加の自由投票、10月31日には鉱山の国有化、そして1953年8月2日に農地改革と教育改革を発令した。

また軍部の改革、石油の開発、そしてオリエンテ（ボリビア東部）地方の開発はサンタクルス県へ日系移住の扉を開き、1954年には沖縄から第一次、二次移住者が入植、その1年後にはサン・ファンへ入植が始まった。MNRとともに誕生したのが革命後の1952年4月17日に発足したボリビア中央労働組合（COB）である。ファン・レチンを長とするCOBとMNRはボリビアの近代には切っても切れない縁をもった。ボリビアがこの時期行った改革は内陸の国ゆえ、開発が遅々として進まないこともあり、世界的な反響は低かったがラテンアメリカの有識者はその過程を見守った。特に農地改革はその効力と欠点が注目されこれ以後のラテンアメリカの改革に役だった。

農地改革を発令するにあたり、パスは「ボリビアは共産主義者を必要としない。政府は共産主義ではない。改革にあたり厳格な態度をとることもあるが、ボリビアでは純真な民主主義を創生する。数多い難問を解決することに米国の援助は我々になにも求めていない」と宣言した。

教育改革はこれ以後著しく発展する。1952年に6歳から19歳の学生数は20万前後だったのが1976年には90万前後、1992年には156万前後と発展している。また言論・文化の表現も自由化して各部門の賞が授けられた。

1956年、シレス・スアソへ政権交代してビクトル・パスは英国へ大使として赴

いた。1960年に帰国、選挙にCOBのファン・レチンを副大統領として立候補、74%の票をかせぎ圧勝する。この第2次政権はオリエンテ、特にサンタクルスの開発に力を注いだ。為替相場ではペソ・ボリビアノが新設され1956年の安定相場を持続させ1972年まで16年の間1ドル・12ペソの相場で安定した。

1964年、ビクトル・パスは3度目の大統領職へ立候補を決めるがこれまで続いたMNRの支配も所々に疲弊が生じていた。かつては同胞だったスアソやレチンが反対にまわり対立候補となった。結果は軍人のバリエントス・オルトゥニョを副大統領に掲げて選挙に勝利した。しかし副大統領と軍部の司令官のオバンド・カンディアが1964年11月4日にクーデターをおこしペルー国のリマへ出国するしかなかった。このとき「私は反対者の肩に掲げられて帰って来よう」との言葉を発した。この政権はその後チェ・ゲバラの野望を打ち砕く軍事政権となる。

ビクトル・パスは1971年までペルーに滞在した。その後帰国、サンタクルス出身のバンセル軍事政権の顧問となるが3年後に軍事政権を批判し出国。1978年に帰国して1979年の選挙に立候補。しかしこの選挙ではだれも過半数を獲得できなかった。翌年の選挙では立候補するも後に辞退した。

1985年、バンセル元大統領のADNと連盟で4度目の大統領に就任。このときボリビアは過去最大の危機を向かえていた。歯止めの利かないインフレは年間25.000%に達していた。生産は絶え、最低給料は7ドルにまで下落していた。就任後の8月29日「ボリビアは死にかけている」と法令21060号を発令した。この思いきった政案は1年でインフレを二桁台にまで抑えて現在までも維持している。この政策の指揮を取ったのが経済相のゴンサロ・サンチェス・デ・ロサダで後大統領へ選出される。

1989年、選挙で新大統領となった甥のハイメ・パス・サモラへ政権を移管後は政界を引退、50年に渡って務めたMNRの

党首も譲って故郷のタリハへ退いた。あまり表にでない生活を送っていたが、1994年オキナワ移住地40周年記念式典に特別来賓として招かれ壮健な姿を見せた。

2001年6月、94歳を迎えようとしていたビクトル・パス・エステンソロは不意にたおれ、木曜日の6月7日、帰らぬ人となった。6月20日、アメリカ国家機構(OEA)は定例会で20世紀の偉人に敬意を表した。

晩年「私の大統領としての特筆すべき事業は日本からの移住者を受け入れたことであろう」としみじみ語っていたという。

参考文献

?HISTORIA DE BOLIVIA

MESA-GISBERT Ed. GISBERT ?ta.Edicion2001

?PROTAGONISTAS DE AMERICA LATINA

FERNANDO SABSAY Ed. ELATENE02003

DIARIO EL DEBER

## リレー随筆-第2回-

### ソラタへの旅

国本伊代

(中央大学教授)

私がアンデスの山間の町ソラタを訪れたのは6年前のことである。ちょうど日本人のボリビア移住100周年記念行事が行なわれた年で、記念誌編纂の作業をお手伝いしていたことから、100年前の1899年に最初の日本人グループが到着したソラタの町を自分の目で見たいと思って出かけたのである。彼らは移民会社森岡商会がペルーに送り出した最初のグループ790名のうちの93名で、新たな就労地を求めてペルーからボリビアへ送り出された人々であった。カリャオから南方のモリエンド港まで船で旅し、そこから列車でチチカカ湖畔のプーノまでやってきて、プーノからは船でボリビア側に渡っている。そして上陸したチチカカ湖畔からソラタまで3日かけて歩いた。このルートをとる、私は飛行機とバスでたどってみたのである。

ソラタは、アンデス山脈の標高2800メートルの尾根が深い谷間に突き出たような地

形に位置している。3月には雨季で、舗装されていない山道はぬかるみ、ラパスからのバスの旅はおよそ4時間かかった。快適な見晴らしのよい高原を走る砂利道が終わり、山腹の曲がりくねった細い土道を下りだすと、バスは車体を揺さぶりながら喘ぐように進む。カーブを曲るたびに、谷底に突き落とされるのではないかという恐怖が襲った。

ソラタを、私はアンデスの山間にひっそりと佇む先住民の集落を少し大きくしたものぐらいに想像していた。しかしソラタは思いもかけないほど近代的な街並みを保つ立派な都市であった。100年前のゴム・ブームの時代に建てられた重厚な石造りの建物が市街地に並び、小さいが整備された中央広場には花々が咲き乱れていた。私が泊った広場の角にある安宿は、かつてこの地方の商業活動を一手に握っていたドイツ人が経営するギュンテル商会の建物であった。1階奥の事務所として使われていた広い部屋には、20世紀はじめの時代がかった机や書棚やタイプライターが保存されており、100年前の地図も残っていた。

19世紀末のソラタはゴムの集散地として栄え、ラパスやペルー側の町との行き来も多い、いわば商業の町であったのだろう。しかし93名の日本人が就労したのはこのソラタではなく、ここからさらに徒歩で1週間はかかる熱帯低地のマピリ川に近いゴム林地帯である。現在でも車輛が通れる道はなく、ガイドを雇って徒歩でなければ行けない地点である。彼らは、約束された労働条件が違うことなどから3ヶ月もたたないうちに就労地から脱走し、ソラタまでたどり着いて警察に捕まり、拘置された。そして彼らを送り込んだ森岡商会の責任者がペルーからやってきて引き取るまでの約2ヶ月間ソラタに留め置かれたが、その間どのような暮らしを強いられていたかはよくわかっていない。

アンデスの美しくもまた険しく、厳しい自然を映した写真を見るたび93名の日本人グループが通ったルートを100年後に辿ってみたソラタへの旅を懐かしく思い出す。  
.....

1年間ご協力ありがとうございました！来年も良き年でありますようご多幸をお祈り申し上げます！

### 大貫良夫理事 TV 出演！ 『世界不思議発見』

2005年11月5日、9PMより、TBSテレビ「世界不思議発見」の番組は「第5の文明への扉 - 古代アンデスの謎 -」で、ペルーの山岳地帯にあるクントウルワシ村の遺跡が紹介された。ここで1989年神殿後に見つかった墓から人骨と副葬品が出土、アンデス最古の黄金芸術の大発見。考古学者の第一人者である大貫良夫理事は、クントウルワシ村で発見時の様子を説明し、村人の希望通りここに立派な博物館を建設した経緯を語った。発掘現場に立って語る大貫先生は赤やブルーのシャツで若々しくはつらつとし、第一人者の力にあふれていた。

### 白石健次理事の新著書出版

2005年11月1日付、近代文芸社から『結論、8月15日 - 日本軍の敗因分析 -』を出版。定価1200円

今あらためて第二次大戦における陸海軍の問題点を探る力作、戦術あって戦略なき軍隊と長年の研究から決め付けているが、134頁にわたるこの本の総ての行間に埋まる日本軍の姿は直接軍隊生活を経験しない若者も著者と一緒に考えて欲しい貴重な一冊である。

#### 編集後記

ボリビアで体験なされたことなどお書きになってお寄せください。原稿は800字から1200字をお願いします。

なおパソコンを利用できる方はワープロで原稿を作成し、E-mailまたはフロッピー、メモリースティックなどでお送り下さると大変ありがたいです。自己紹介の意味でボリビアとの関わりを数行お書き頂いた上で本題に入っていただくとありがたいです。

よろしく願いいたします。

.....  
(編集委員)

**社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACION NIPPON - BOLIVIA**

〒151-0053 東京都渋谷区代々木 1-58-10 第 1 西脇ビル 1 階

Tel: 03-5333-2488

Fax: 03-3370-0143

---

杉田房子委員長、大貫良夫、細野 豊

( 広報委員 )

渡邊英樹、長嶺為泰、細萱恵子